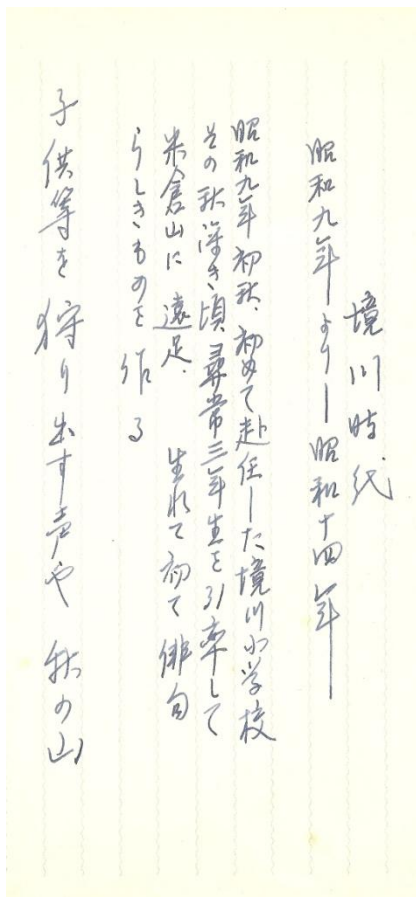
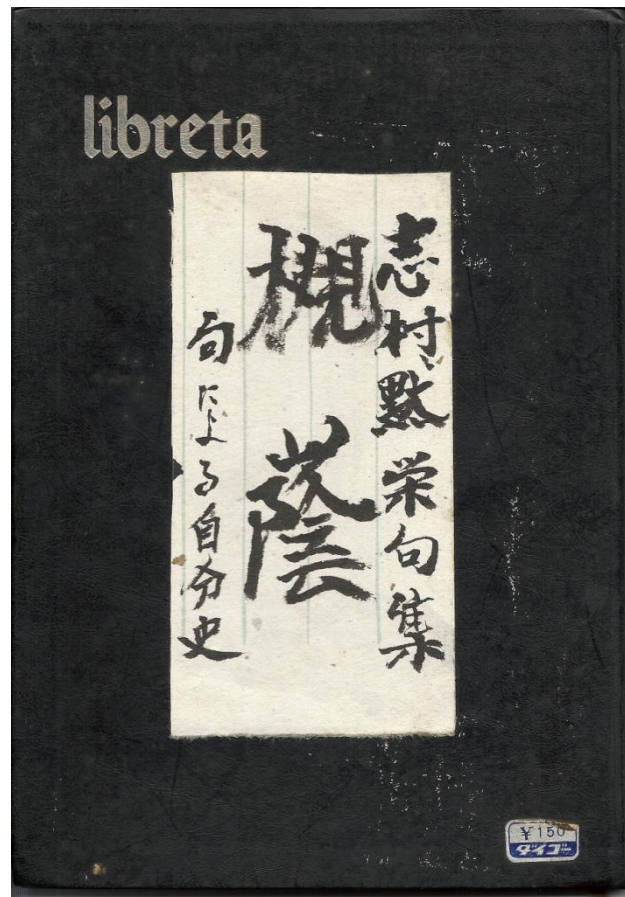


槻蔭

志村黙榮句集 について



黙榮句集『槻蔭』は、黙榮＝榮助がおそらく昭和四十年頃に自分で自作から約四百句を選んだ句集である。

せめて自費出版であっても、と出版の夢はあったであろうが、それは夢だけで、その後継続的に実現しようと努力したかどうかは疑わしい。句集を出すから、資金援助してくれというような事を云われた事も無い。

黙榮はだいたい四十歳くらいで句作をやめてしまったので、この句集に選んだ昭和十年代から昭和二十八年までの作は「句による自分史」とあるように、彼の作品の集大成と言う意味があるのかもしれない。

この時代の黙榮は教員を辞め、専業の百姓になって、農地解放＝黙榮の言葉によれば、マッカーサー命令、により小作地を手離し、水呑み百姓になってしまった志村家を文字通りの腕一本で支える立場にあった。句集『槻蔭』も、稲作、養蚕、野菜作り、果物づくり、農作業や田畑での風

景と、際限なく作業が続く百姓の生活の句が大部分を占めている

早稲田大学文学部に進学し、日本の古典文学研究が夢であった、という彼の心の中には忸怩たる思いがあり、俳句にも「こんなはずではなかったに」、というような捻くれたものもある。

そうした中、何より食って行くのに精一杯だった昭和二十年代に、季節の移り変わり、それに伴う日々を真摯に俳句で表現し続けた黙榮はわが父ながら偉いと思う。

槻とは櫟（けやき）の大木の事、蔭はその陰、すなわち『けやきの大木の陰で』という事になる。これはもちろん、裏の大櫟の下で営む生活（たつき）を詠んだ句集であるという意味である。この題はまさに云い得て妙で、他所を訪れての句もあるが、本句集の昭和二十年以降の句はこの櫟の木の下か、櫟の木が見える範囲で詠んだ句である。



上は昭和十年代、下は昭和二十年代の撮影。

二枚の写真にある母屋の屋根の大きさが異なる。昭和二十五年頃、家の西側を二間もぎ取る縮小工事をした為、下の写真では屋根の煙出しが西側にオフセットしている。写真はその工事完成記念かもしれない。屋根が白っぽく写っているのは、葺いてから日が浅いのか。岩松を載せた芝棟が凜凜しい。

黙榮ワールド

こう言いたくなる秀句がある。

しんとした静かな、あるいは厳しい風景の中に、一寸華やかさや楽しみがある、という場面を切り取り、それで建付けが良い、という句である。

たとえば…

のぼりつめ穂麦は風ある天道虫

鳶低く傾き流るる南風の畑

世話人の古紋服や春祭

虹の脚明るく麦は黄熟す

荒ぶ日の花粉を空へ松大樹

苗代の雨に芍薬影しづか

蚕やぐらをひらひら渡る大百足

へらくと冴えかえる夜の爐火澄める

胸札の墨痕淋漓たり入学児

大でまりこの静かなる黄昏を

かえり咲く木犀の香にとつぎ来ぬ

冬構え柚子蒼天を輝かす

いかがであろうか。

読みについて

句集『槻蔭』の原稿は黙榮の手書である。読み仮名を振ってくれている場合は問題ないが、それも気まぐれか、黙榮の感覚で難読と思ったものだけである。

黙榮は自分の欠点としてほとんど唯一自分で認めていたのが悪筆であった。さらに独特の崩し方をするので判読

はかなり難しく、図書館の難読漢字辞典や古文書解読の草書解読参考図書にずいぶんとお世話になった。それでも二、三の文字は読み方に確信が持てない。

また、どう調べても意味が判らない言葉がかなりある。自称「日本で十一番目くらいには学がある」黙榮であるので、どこかの古典からひっぱっている可能性もあるが、造語としか思えない言葉もある。また、誤字ではないかと疑われる部分もある。

それらについては私の判断でこうであろうという解を出し、解説編にその旨を書き添えてある。本編を読んで「ん?」と思われたら解説編にあたって見て下さると嬉しい。また、そうじゃないだろう云うご意見があったら、ご指摘頂けるとなうれしい。

また、前述の通り、この句集は過去に作った句を約十〇

二十年の歳月を経てから自分で選句したものであるが、句集ノートに記載してからなお直したものがある。はつきり消去線が引かれた部分は無いものとし、書き加えられた方を採用した。問題は前の作を消さずに併記したものが幾つかある事で、これらについては後から記載したと思われる方を採用した。解説編では消去線が引かれていなかった旧作も紹介してある。

季語について

黙榮の季語の扱いは一言で言うと「自由奔放」である。俳句の禁忌の季重ねや、歳時記の季語を別の季節に使ったり、一つの句に本来の季語とは別に、季節が違う季語を入れたりする季違いもしている。

黙榮は万事緻密という性格ではなかったが、こと文学に

ついでには好きな道であるので文献に読むに労を惜しまなかった。句作に於いても歳時記に当る事も無く作ってしまった、などという事は絶対に無く、全ての句は研究と推敲を重ねていた筈である。そのうえでの季重ね、季違いであるから、ある意味たちが悪い。

季重ねや季違いによって、新しい俳句の世界を作ろうとする試みもあったのかもしれない。しかし、この態度は、あまり倣わない方がよさそうである。私の感ずるところ、季重ね、季違いの句は黙榮の力量を以ってしてもテーマが散漫になり、何に感動したのか判らない句が多い。

黙榮の俳句観

黙榮とじっくり俳句談議をした事は私がごく若い頃数回だけ、時間も通算で数時間しかないが、かれの考え方は、俳句は五・七・五の定型詩である。従って自由律や不定

形句は俳句として認めない

季語は絶対必要である。従って無季の句というのも俳句として認めない。

主となる季語が俳句を律していれば重なってもよい。

また、季節の感覚を詠むのが俳句だから、より深く鋭くなるなら重なっててもよい。

他に、

女流に多い、生活をストレートに詠んだ厨房句は一段低いものである。

花が咲いてきれいだ調の予定調和句や、教訓ばい句は月並みといってこれを排す。

黙榮の「こりやあ月並みだな」は俳句（勿論、五・七・五で季語を備えた最低限の体裁は整っている事が前提である）に対する最大限の悪口であった。

私が若い頃、黙榮に見せた習作は悉くこの一言で一刀両

断され討ち死にしてしまった。このため黙榮に弟子入りするのを諦めてしまった程である。

黙榮好み

黙榮が好きだった俳人は飯田龍太、次に蛇笏。ただ「龍太は句集を詠んでいると親父の蛇笏より凄いと思うが、これだという代表作がない」。と言っていた

芥川龍之介は素晴らしい俳人で、残っている全てが良い句であると語り、ほとんどを諳んじていた。

黙榮という俳号

昭和二年の徴兵令改正により、師範学校卒業生は短期現役兵制度による五カ月間の兵役後、下士官^{II}伍長で退役することになっていた。昭和九年四月、榮助は二十歳で山梨師範学校本科二部を卒業、直ちに短期現役兵制度により甲

府四九聯隊で五カ月間の兵役に就いた。榮助は五尺五寸で一六貫、当時としては巨人であったので、体格の良い兵隊が選抜される十一年式機関銃の銃手の訓練を受け、予定通り陸軍伍長で退役、昭和九年九月、二十一歳で境川尋常小学校に赴任した。

学校ぼつと出の若い教師が田舎の小学校に赴任と云う、田山花袋の『田舎教師』の清三そのままであった。それからあらぬか、『田舎教師』は榮助の愛読書の一つであった。

とはいえ、境川はただの山村ではなかった。家と小作を守る為に東京から戻った飯田蛇笏が境川山廬を結んでいたのである。昭和九年当時、蛇笏は第一句集である『山廬集』を出したばかり、油の乗り切った五十歳であった。

やがて本格的に蛇笏に師事することになるが、最初は興

味半分に山廬の門を潜ってみた榮助、正面に蛇笏、脇には共に四十代の飯野燦雨、五味洒蝶がいては、二十歳そこそこの若造は恐縮しているしかない。そこで賜った俳号が、黙っている榮助＝黙榮である、と本人は語っていた。

晩年の傍若無人の「悪口雑言の天才」、「ほら吹き榮助」しか知らない息子からは想像もできないが、微笑ましいエピソードである。

しかし、この黙榮、すぐに地を發揮、先輩には勿論、師にも遠慮のない口を利くようになったであろうことも想像にかたくない。

もしかすると、本人の語る黙榮の謂れも得意の「ほら」で、本当は「ちっと黙ってろ、榮助」であつたのかもしれない。